



サボちゃん

通信

No. 7

自然が好き

生きものが好き

目次

・さぼちゃん、サポ茶を作る	2
・今年の夏のトピックス	4
・ヒゲナガという名の蛾	5
・この虫の名前、何か変じゃない	6
・サポーターの楽しみ	9
・幸せを呼ぶ(?) 青い蜂	10
・2020年 びっくりしたなあ ガ・ベスト5	11
・名前のつけ方	12
・同定の分かれ道	13
・鴻ノ峰の生き物図鑑	14
・表紙描いて四方山話	16
表紙・イラスト	原まゆみ

さぼちゃん、サポ茶を作る

今年の0円花壇は、去年の秋から春にかけて行われた博物館別館の塗装工事と、新型コロナウイルスの影響で思うように活動できないという二重苦ですっかり荒れてしまいました。

去年はアサギマダラが群れ飛び、写真を撮りに来る人もいたフジバカマの花壇は工事資材置き場に使われたためかなりの株が傷んでしまい、今年来てくれたのは3頭を数えるのみ…他の草花もかなりのダメージを受けました((((;°Д°))))))

しかし強かったのがカワラケツメイ！2年前、ネットで種を買って栽培を始めた時には、プラグポットに撒いて丁寧に水をやって…なのに発芽率悪しく、諦めて花壇予定地にそのままばら撒いたような状態だったのに…逆境の今年は茂った、繁った\\¥¥¥(' ω ')、///世間的には段々と少なくなっているというカワラケツメイ、逆に放つたらかしがよいのかしら、遅しくて愛いヤツ♡

そこでさぼちゃん、これを今年の0円花壇の証にしようとお茶作りに

挑戦しましたよ！

鞘が熟すまで繁らせたカワラケツメイを刈り取って束ねてカラカラに干し、ザクザク切って、芳ばしく焙じて…試行錯誤しながらも名付けて「サポ茶」が出来上がりました。

カワラケツメイのお茶は、山口県立大学の研究によれば、サポニンを豊富に含み、身体に余分な脂肪がつくのを防ぐとか。逆境に負けない強さももらえそうです。

美味しくいただいて健やかに！

2021年は0円花壇の再生を目指します。

(間田敬子)



収穫したカワラケツメイを乾燥



今年の夏のトピックス

私にとって今年の夏の思い出と言えば、「ミヤマカミキリ」を飼ったこと。と言っても一週間。

県立博物館で開催した恐竜展を見に行った時、知り合いから、道路にいたというカミキリムシを譲り受けました。フォルムの素晴らしさに一目惚れ。特に長い触角！！標本にするまで飼うことに。

触角を傷つけないように2ℓのペットボトルを切って入れ物にした。櫛の皮と小枝を入れ朝夕、霧吹きで水やり、キューと鳴くのが可愛い（もしかして悲鳴？）。

一日三回エサのスイカの皮を取替え、日中は玄関の涼しい所・夜はベランダに。

日中は静かにしているが夜になるとガサガサ動き出す。多分普段もこんな感じなのだろう。

逃がそうと思ったが、車にひかれたら・・・他の人に捕まったら・・・といろいろ思ってこの個体をそこないたくない。

後日無事標本になりました。

（本間喜美恵）



ミヤマカミキリ（カミキリムシ科） 長い触角が目立つ 体長約5cm

ヒゲナガという名の蛾

今年最も印象的だったのは、ずっと憧れていたヒゲナガガ科の蛾に出会えたことである。今までこのフィールドで2種類採取されていたが、自分ではまだ出会ったことがなかった。それが今年4月の採集会でついに出会うことができた。



ムモンケブカヒゲナガ

最初の出会いは他のメンバーから「杉林の下草の上に小さなきれいな蛾がいるよ。」と声をかけられた時だ。見に行ってみると、1匹だけ黒っぽい金属光沢をもつ美しい蛾がいた。体長1センチ強。近づくと閉じた羽の4倍はありそうな長い触覚が見えた。

その瞬間、ドキッ「ヒゲナガだ！」体が硬直し、息も忘れた。脅かさないようにじっくり見ていると草の上で羽を広げようとしている。慌ててネットを振るい採集した。透明な容器に移してじっくり観察すると、発生したばかりの美しい個体でしばらく見入ってしまった。もう嬉しくて、サポートメンバーひとりひとりに「ヒゲナガが取れました。」と瓶の中の蛾を見せて喜んだ。

通りすがりのネットを持った小学生にも、「これが取れたよ。」と見せると、「きれいですねー。あ、これ下の方にいっぱいいましたよ。」との事。「え、ほんとに？どのあたり？」早速、場所を聞いて行ってみた。すると「あ、いた！」5～6頭の雄と、1頭の雌がすぐに見つかった。後で調べたらムモンケブカヒゲナガという名前であった。

糸米川砂防園周辺は市街から近く、良く整備され本当に素晴らしいフィールドだ。この美しい蛾に毎年出会える場所であり続けてほしいと心から願っている。(吉本進)

この虫の名前、何か変じゃない

我々、県立博物館サポーターは月に二回程、同じ場所で昆虫の観察、収集をしています。そして採集した虫たちを同定して標本にするのですが、名前を調べるために図鑑を見ていると奇妙な名前に出くわすことがあります。それは〇〇モドキ、〇〇ダマシといった名前の虫たちで甲虫の仲間だけでもエンマムシモドキ、ホタルモドキ、ジョウカイモドキ、コメツキモドキ、カミキリモドキやコメツキダマシ、テントウムシダマシ、ゴミムシダマシ、ハムシダマシ、クチキムシダマシの種類がいます。モドキとは「似せて作ること」、「似せて作ったまがいもの」の意味でどちらかといえば悪い意味で使われるものです。また、ダマシも同様に悪意を込めた言い方です。

何故、このような名前が付けられたのでしょうか？

A:「変わったテントウムシ見つけたよ。」

B:「テントウムシの仲間だよ。前に見たことある。」

A:「よく見るとテントウムシとは体つきが違うよ。」

B:「そうだね。テントウムシとは違う種類だね。」

A:「名前はどのようなか？」

B:「これまでテントウムシの仲間だと思っていたのにだまされていたのだからテントウムシダマシと呼ぼう。」

もし、このような経緯で名前が決められたとしたら、なんと悲しいことでしょう。

人間であれば裁判沙汰になるかもしれません。これらの他にもチビ、ニセ、ナミが付いている名前の虫たちがたくさんいます。どうか昆虫の研究を生業にしている方々、これらの虫たちに敬意を払い、彼らに尊厳を与えるような名前に変えていただきたいと切に思います。

(村上敬司)



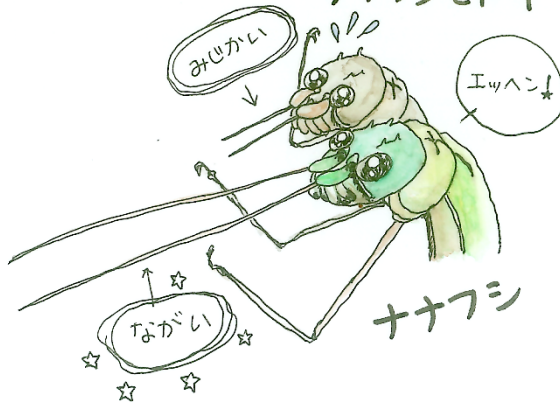
カマキリ

にている？

カマキリモドキ



ナナフシモドキ



サポーターの楽しみ

サポーターの活動である鴻の峰での観察活動の楽しみは、昆虫採集と、その後の標本作りです。

ある夏の暑い日は、歩き回らず、川の近くで時々やってくるトンボをねらう作戦にしました。ベンチに座って待つこと 20 分ほどで、来ました、来ました。黄色と黒の胴体です。オニヤンマかと思いながら飛んで



ミルンヤンマ 全長約 7 cm

いる様子をよく見ると、羽は透き通っていて張りがあり、とても美しい。木の枝にとまったところで近づき、飛び立つ瞬間を狙ってなんとか捕まえました。博物館に帰って調べてみると、ミルンヤンマでした。はじめて見るトンボでした。

小学生の頃、姉と一緒に小遣いをためて、小学校の裏門の前にあった駄菓子屋兼文房具屋で昆虫採集セットを買いました。注射器、はさみ、ピンセット、赤と青のプラ容器に入った薬品らしきものが入っていました。二人で夢中になってセミやトンボ、蝶を捕まえて、腹に赤の液、青の液を次々に注射器で入れたことをよく覚えています。

今はサポーター活動で、正しい標本の作り方を教えてもらっています。セミは肉食ではないので、標本にする際にお腹の中の処理は必要ないことも知りました。蝶も同じですが、羽をきれいに広げてとめる作業があります。展翅板に蝶をのせて、羽の筋に針を沿わせてそっと動かし、きれいに羽を広げる作業は何度やってもいつも楽しいひとときです。

やはり、昆虫採集は大人になってもわくわくするものです。小さい頃も楽しかったけれど。それにしても、あの昆虫採集セットのプラ容器に入った薬は何だったのでしょ...？
(村中明子)

幸せを呼ぶ(?) 青い蜂

9月19日の観察会でサポーター仲間がきれいな青い蜂を捕まえていました。名前はルリモンハナバチ。黒い体に鮮やかな青い斑紋が印象的です。同日の朝日新聞に、「幸せを呼ぶ青い蜂」とも呼ばれるこの蜂が北九州の公園でみられ多くの写真愛好家が訪れていると載っていました。私も5年前に1度だけ常盤公園の薬草園で見かけました。飛び回る姿にまた会いたいなあ・・・



ルリモンハナバチ 体長約 1.3 cm

翌日、地元の竜王山へ。春は桜・初夏はヒメボタル・秋にはアサギマダラが飛来する自然あふれる場所です。駐車場から木漏れ日の中、登山道を歩きながらあの蜂を探しました。すぐに見つかるはずもなく、20分ほどで頂上近くの休憩場所に到着。桜の木々の間から遠く関門海峡まで見渡せるお気に入りのポイントです。ベンチに腰掛け、ふと気づくと足元の紫の小花になんとあの青い蜂が！！花から花へせっせと蜜を集めています。

この場所で、春にはエサを運ぶ親ヤマガラと可愛いひなの声を聴き、夏には目の前の草むらから飛び立つタマムシを発見し、そして秋には元気に飛び回るルリモンハナバチに出会えました。

青い蜂が呼んでくれたかは分かりませんが、あらためて身近にこんな豊かな自然が今も守られている事が有り難く幸せを感じました。

(藤田かおる)

2020年 びっくりしたなあ ガ・ベスト5

第5位「オオスカシバ」 トンボのような透けた翅が美しいガです。しかし、羽化して間もない時は翅に鱗粉がついているため、透けていません。その姿を5月の朝、新聞を取るため玄関に出た時、足元で見つけました。私はうれしかったのですが、玄関脇に植えているクチナシは、幼虫がその葉をすっかり食べつくし毎年悲鳴を上げているようです。

同率第3位「メンガタスズメとクロメンガタスズメ」 背中に人の顔のような模様があります。今年の夏は、我が家のウッドデッキでよく出会いました。夜、甘い蜜を吸うためにニホンミツバチの巣箱に入ろうとしているところを見つけました。目は光り、キーキー鳴いていました。入口が狭くて中に入れなかったので、ホッとしました。

第2位「セスジスカシバ」 スズメバチに擬態した姿に私はすっかりだまされました。9月の鴻の峰での昆虫採集、陽だまりの草むらにオオスズメバチに似たハチを見つけました。刺されては大変なので、網で採るとすぐに毒瓶に入れました。標本にするため取り出すと指に鱗粉がつきます。うわあ！ハチじゃなくてガだったなんて、私はすっかりだまされていました。

第1位「フクラスズメ」黄色と黒の派手な色合いの幼虫はカラムシの葉を食べ、危険を感じるとビヨンビヨンと体を大きくゆすります。成虫は我が家の物置がお気に入り、出会う頻度が多いガです。指の上に乗せてみると、ぶるぶると振動が伝わりました。命の躍動を感じ、もふもふの小さなあなたも生きてるんだね！と強く感じた瞬間でした。

2021年はどんなびっくりに出会えるのでしょうか？楽しみです！

(上田 貴子)

ガ・ベスト5



オオスカシバ（スズメガ科）開張約 6 cm
羽化直後の鱗粉を付けた状態 成虫は8-
9月にみられる



セスジスカシバ（スカシバ科）開張約 3.5
cm 食草はキイチゴ類 成虫は8月下旬-
10月中旬にみられる



メンガタスズメ（スズメガ科）開張約 11
cm 食草はナスなど 夏期に出現



クロメンガタスズメ（スズメガ科）開張
約 12 cm 食草はナスなど 夏期に出現



カラムシの葉を食べるフクラスズメの幼虫 個体数は多く、成虫
は人家などに入り越冬する。

名前のつけ方



カトウツケオグモ メス
カニグモ科 体長約 10 mm
溪流沿いの林道で発見。目立たない体色のため、じっくり見ていかないと探すことができない。

2年前の7月、鴻の峰で活動中、杉の枯葉の上に1 cmにも満たない白黒の何かがくっついていました。鳥の糞にも見えますが虫にも見えるのでビニール袋に入れて持ち帰り調べてみると、名前はカニグモ科ツケオグモ属の「カトウツケオグモ」でした。和名は東京高尾山で最初に発見したセミの学者加藤正世氏に因んで命名されたクモで、個体数は極めて少ない稀少種だそうです。それを今年8月再び見つける事が出来、とてもラッキーだと思いました。

中生代の恐竜で人気者のティラノサウルスには、化石発見者に因み「スー」(スー・ヘンドリクソンさん)、「スタン」(スタンリー・サクリソンさん)などの愛称が付けられています。

今夏の特別展で映像展示されていた北海道のカマイサウルス・ジャポニクスは、出土した地名から「むかわ竜」として親しまれているそうです。

また、最近のニュースでは、約3000万年前のプロトプテルム科鳥類の化石が、研究の結果新種である事が判明し“関門海峡の鳥”という意味の「ステノルニス・カンモンエンシス」と名付けられています。

もしも、私が新種の昆虫をみつけたら、何て名前をつけましょう。可能性はゼロではない、2021年もガンバロー！！ (山田恵美子)

[参考] 日本のクモ 文一総合出版

同定の分かれ道



🐛 同定作業は種がどの目に入るか見当つけるところから始まります。
 🐛 その中間分けが迷路への一歩になることも... 見た目が全てではありません。



アリクモ 2020. 8.22



触角ではなく脚が身体擬態している!
 🐛 ワタシクモ
 生態もアリに似ている

🐛 アリに捕食されなくても、アリの天敵には多量に殺されたいだろうか? などと心西己になります。



クスノチビタマムシ 2020. 8.22



地味だけどタマムシ
 体長 5mm ほど
 食草はクス
 (名前の由来)

🐛 クスは繁茂力の強さから時にはやっかい者に。クスノチビタマムシが餌えることはなさそうです。美しい翅に鬼赤とされるヤマトタマムシと違って淡い色ですが、その小さな姿と愛らしい名前に心惹かれます。



🦋 素早く動くチョウやトンボはなかなか木の糸網に入ってくれません。そこで目につくのは、樹上や草の上に止まっている小さな生き物です。



岡田美子

鴻ノ峰の生き物図鑑



2020年5月30日 エゴツルクビオトシブミ（オトシブミ科）（オス）体長約9mmとエゴツルオトシブミのメスが産卵のためにつくったエゴノキにできた揺籃（ようらん）。毎年5月の中旬から6月初旬にみることができる。



2020年8月1日 コブオトシブミ（オトシブミ科）体長約7mm 春から夏にカラムシなどイラクサ科の植物の葉に揺籃を作る。

2020年4月10日 コミズク（ヨコバイ科）体長約10mm 春から秋に確認できる。



2020年7月4日 イヌホオズキの葉が萎縮し、内側に巻いている。

巻いた葉の内側にはアブラムシとアリがいる。葉の萎縮はアブラムシの仕業か？アリの安全な食糧庫

鴻ノ峰の生き物図鑑



2020年8月22日 上田貴子さん発見 ムラサキホコリの仲間（変形菌）
溪流沿いの枯れ木に髪の毛みたいなものがついているのを発見。形はどんどん変
化するため、その時を逃すとみることができない。



2020年8月22日 クロアゲハ4齢幼虫（左）と終齢（5齢）幼虫（右） 1mほ
どのカラスザンショウ（ミカン科）の樹の葉を食べていた。じっくり観察できた。
カラスザンショウは大木になるため、目線で観察できると嬉しい。

表紙描いて四方山話

ティラノと〇〇

今年の特別展は「生物の進化と恐竜ワールド」でした。地球史年表を見ると、人気のティラノサウルスは6800万年から6600万年前に生きていましたが、今はもういません。一方、嫌われ者のゴキブリは3億年前くらいから繁栄を始め、その頃から今まであまり変わらない姿で生き続けています。どんなに環境が変化してもどんなに嫌われても生き続けてきたゴキちゃん、あなたはすごい♡

(原まゆみ)



山口博物館サポーター動物班活動報告 “サポちゃん通信” No. 7

発行 2020年12月19日

編集 山口県立山口博物館サポーター動物班

発行 山口県立山口博物館 〒753-0073 山口市春日町8-2

Tel 083-922-0294 Fax 083-922-0353

サポちゃん通信バックナンバーも閲覧可能

<http://www.yamahaku.pref.yamaguchi.lg.jp/supporter.html>

